関西美学音楽学論叢　第 5 巻　2021 年
Kansai Journal of Aesthetics and Musicology, Vol. 5, 2021

趙孟頫の書における評価の変遷

The transition of the evaluation in calligraphy works of Zhao Mengfu

根來　孝明
Takaaki NEGORO

要旨

中国・元（1271～1368）を代表する書家である趙孟頫（1254～1322）は、在世当時から書に巧みなことで著名であり、現存する作例も多い。また、趙孟頫の書を論じた文章、すなわち書論における趙孟頫の研究も、作品の検討と併せて行われてきた。だが、趙孟頫の書における評価が、いつの時代に、どのようになされているのかについて、俯瞰的に検証されたことは少ないように思われる。

以上のことを踏まえて、本稿では、趙孟頫の書における評価が、在世時から現代にいたるまで、どのような変遷を経たのかを検討する。

そのために、第 1 章で、現代の記述を確認しながら、趙孟頫の書が一般的にどのように評価されているのか確認する。第 2 章で、在世当時から清（1644～1912）までの評価の変遷を確認し、趙孟頫の書は、その作為的な面が当初は高く評価されたものの、明代以降は批判的に取り扱われるようになることを明らかにする。また本稿では、趙孟頫の書における評価の変遷を通して、書の歴史がどのように記述されているのか考察する。

はじめに

中国・元を代表する書家の 1 人に、趙孟頫がいる。彼は、呉興の人、字を子昂といい、自ら松雪道人と号した。もと宋（960～1279）の宗室であったが、26 歳の時に宋が滅亡し、至元 23 年（1286）以後は元の世宗（1215～1294）に仕えた人物である。

趙孟頫は、在世当時から書に巧みなことで著名であり、現存する作例も多い。これらについては、書写内容と制作年代の特定が行われており、すでに一定の研究成果がある。また、趙孟頫の書を論じた文章、すなわち書論における趙孟頫の研究も、作品の検討と併せて行われてきた。だが、その多くは、趙孟頫が生存していた元時代の言説、あるいは、彼を痛烈に批判した明（1368～1644）の董其昌（1555～1636）による言説が多かった感が

ある。すなわち、趙孟頫の書における評価が、いつの時代に、どのようになされているのかについて、俯瞰的に検証されたことはないように思われる。

以上のことを踏まえて、本稿では、趙孟頫の書における評価が、在世時から現代にいたるまで、どのような変遷を経たのかを検討してみたい。

そのために、第 1 章で、現代の記述を確認しながら、趙孟頫の書が一般的にどのように評価されているのか確認する。第 2 章で、在世当時から清までの評価の変遷を確認し、趙孟頫の書は、その作為的な面が当初は高く評価されたものの、明代以降は批判的に取り扱われるようになることを明らかにする。また本稿では、趙孟頫の書における評価の変遷を通して、書の歴史がどのように記述されているのか、考察を試みたい。

第 1 章　趙孟頫の書に対する評価

本章ではまず、現在における趙孟頫の一般的な評価を確認しておこう。そのためにまず、辞書における「趙孟頫」の書に関する記述を見てみよう。例えば、『新潮世界美術辞典』には次のように記されている。

> 書においては篆籀・分隷・真・行・草各体の書に通じ、とりわけ王羲之への復帰に努め、その書風は以後の時代および朝鮮・日本にまで影響を与えた[1]。

このように、趙孟頫の書については、次のことが記されている。すなわち、「一つの書体ではなく、各書体を能くしたこと」と、「王羲之への復帰に努めたこと」である。後者については「復古主義」という語が用いられることもある[2]。他の辞書類においても、ほぼ同様の記述が見られる。

趙孟頫の現存作例については、陳建志氏によって、収集・整理が行われ、陳氏による鑑別も行われている[3]。たしかに、趙孟頫は様々な書体による作品を残しており、元時代における他の書家と比較しても、多彩な表現が認められると思われる。さらに言えば、「各書

---

[1] 『新潮美術辞典』新潮社、1985 年、944 頁を参照。

[2] 例えば、『中国書法史を学ぶ人のために』では、元を「文化的には復古の風潮の時代」であるとし、また「趙孟頫が標榜した復古主義は、同時代の書人の共鳴を呼んだ」と記されている。杉村邦彦編『中国書法史を学ぶ人のために』世界思想社、2002 年、164－167 頁を参照。

[3] 陳建志『趙孟頫の書における時期区分の研究』筑波大学博士論文、2014 年

体を能くしたこと」は、中国書法史における「書聖」王羲之を想起させる要素でもある。このことは、唐（618～907）の孫過庭（648～703）によって書かれた書論である『書譜』において、次のように語られている。

また、次のように主張する者がある。「王献之（344～386・王羲之の第 7 子）が王羲之に及ばないのは、王羲之が鍾繇（151～230）・張芝（正卒年不詳）に及ばないのと同じである」と。これは大筋をつかんだ議論ではあるが、終始を明らかにした総合的な議論ではないのである。そもそも鍾繇は隷書だけが上手く、張芝は特に草書に優れているが、王羲之はこの二人の長所を兼ね備えているのである。草書を比較すれば真書（楷書）で勝り、隷書を比較すれば草書の方で勝る。一つだけの技巧ではやや劣るが、博くこなせるということでは遥かに勝っている。その全体を総合評価すれば、王羲之が鍾繇・張芝に及ばないという評価は正しくないのである[4]。

鍾繇は隷書、張芝は草書という特定の書体を得意としていることに対し、王羲之はあらゆる書体を「博くこなせる」、すなわち「各書体を能くした」と指摘される。このように、あらゆる書体を書けることは、王羲之の巧みさを称揚するための根拠として、すでに唐代に述べられていた。

このことを踏まえれば、趙孟頫が各書体を能くするという評価には、王羲之の書に対する評価が重ねられているように思われる。これらの出典については第 2 章で確認することとして、本章では、王羲之との関連から、趙孟頫について確認しておこう。

王羲之は東晋の人物であり、当時から書を能くしたことが語られてきた。だが、王羲之の書は一点たりとも現存せず、拓本などの複製によって、その姿が伝えられるのみである。このような状況は、趙孟頫が生きた元においても、ほとんど変わらなかったと思われる。すなわち、「王羲之への復帰」ということは、そもそも、具体的な王羲之の書におけ

[4] 又云。子敬之不及逸少。猶逸少之不及鍾張。意者以為評得其綱紀。而未詳其始卒也。且元常専工於隷書。百英尤精於草体。彼之二美而逸少兼之。擬草則余真。比真則長草。雖専工小劣。而博渉多勝。総其終始。匪無乖互。孫過庭『書譜』本文は、『故宮法書選一　書譜』二玄社、2006 年、6－7 頁を参照。なお、引用文中の（　）は筆者による補註である。

る「形」を厳密に再現することではない。それは、拓本などの複製を通して、王羲之の書という理想的な文字の姿を表現することなのである[5]。

このことを、個々の作品に基づいて検討しなければ、趙孟頫と王羲之について語ることは、漠然としたものとなってしまう。

だが、このことは、中国書法史研究において明言されていることは少ないように思われる。例えば、中国と日本の書を網羅的に収めた『書道全集』に掲載されている神田喜一郎氏による趙孟頫の解説では、次のように記されている。

> かれは王羲之の書の正統的な伝統が、唐の中葉以来とかくかき乱されて、古法の荒廃に帰しているのを慨き、敢然と復古主義を標榜して立ったのであった。いったい王羲之の書は貴族的で、したがって宋王朝の時代においても、宮廷では王羲之の典型が重んぜられ、歴代の天子の多くは王羲之の型の書を善くした。わけても徽宗、高宗、孝宗の三人は、その達人であった。宋の貴族である趙孟頫が生まれながらにして、そうした伝統を承けていたことはいうまでもなかろう。かれはただに書法のみならず、画においても復古主義を奉じたし、詩においても唐調に尸祝した。復古主義は、かれの芸術を一貫した基調であったといい得る[6]。

王羲之の書を「貴族的」とし、趙孟頫もその伝統を承けていたと述べるものの、趙孟頫が王羲之の書をどのように学んだかが語られていないため、これらの指摘が漠然とした感は否めない。このように、王羲之と趙孟頫の結びつきは、定説として語られるものの、具体的な事柄が語られることがほとんどないように思われる。

なお、神田氏が述べる、王羲之の書の伝統が「唐の中葉以来とかくかき乱され」たというのは、顔真卿（709～785）の書が出現したことを示している。神田氏は、『中国書法の二大潮流』において、中国書法史には、王羲之の流れに属する「伝統的な書風」と、それ

---

[5] 趙孟頫が王羲之の書をどのような姿として表現しているかは、拙稿「趙孟頫による書聖・王羲之のイメージ生成――《蘭亭序》臨本を手がかりに」『美学』第 256 号、美学会、2020 年、73－84 頁を参照。

[6] 神田喜一郎「中国書道史 12　元、明 1」『書道全集』17、平凡社、2－3 頁

に「叛旗を翻した」書風が存在することを指摘している[7]。さらに言えば、神田氏は後者の書風について、その最初期を張旭（正卒年不詳）とするが、「それをうけついで、はじめて見事な成果を挙げた」のは顔真卿だと述べ、その流れに宋の蘇軾（1036～1101）と黄庭堅（1045～1105）を位置付けている[8]。

宋は、蘇軾や黄庭堅のように、王羲之に「叛旗を翻した」書風が台頭した時代であった。そのような時代にあっても、宋の宗室に属する趙孟頫は、王羲之の「伝統的な書風」を承けていたと、神田氏は指摘する。さらに、王朝が元に交代するに伴って、「伝統的な書風」が台頭してきたと述べている。このような中国書法史観は、神田氏以外も述べており、現在でも支配的であると思われる[9]。

以上のことから、趙孟頫は、王羲之などの唐以前の「伝統的な書風」を範として学ぶ「古典主義者」であり、その「典型を完成」した書家であるとされている。では、このような言説は、いかにして形成されてきたのであろうか。次章では、近代以前の書論において、どのように記述されているかを見ておこう。

第 2 章　近代以前の評価

本章では、近代以前の言説を確認する。まず、趙孟頫在世中の評価として元代の記述を取り上げ、明・清へと評価の変遷を見ていくこととしよう。

第 1 節　元代の評価

趙孟頫研究において、在世中の評価として第一に引かれるのは、宋濂（1310～1381）による言説である。彼は、趙孟頫の書を評して次のように述べている。

---

[7] 神田喜一郎『中国書法の二大潮流』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会、1959 年を参照。

[8] 神田、前掲書、25－41 頁を参照。

[9] 中田勇次郎氏も「趙孟頫は、まったく純粋な古典主義者であり、王羲之を尚び、唐以後の書は取らないという徹底した方法によって、しかも各体の書において書の典型を完成することにつとめて、その成果をあげたのである」と述べ、神田氏とほとんど同様の見解を示している。中田勇次郎『中田勇次郎著作集』第 4 巻、二玄社、1985 年、216 頁

はじめは思陵（宋の高宗・1107～1187）を臨書し、後に鍾繇、王羲之、王献之などの諸名家の書を学び、晩年は李北海（李邕：678～747）の書風を参考にした[10]。

宋濂はこのように、趙孟頫の書における変遷を簡潔に示している。趙孟頫が、若い頃は宋の皇帝に倣った、ということは、26 歳まで宋で過ごした趙孟頫の出自を鑑みれば、説得力のある言である。また、その後に鍾繇・王羲之・王献之という中国書法における古典を習うということも、誰からも非難されることのない書法学習である[11]。晩年は李邕の書を参考にしたというのは、書家としての名が高まり、石碑原稿の揮毫が増えたことを示しているようにも考えられよう。この「三変説」については検討すべき点もあるが、現在でも、趙孟頫の書を評するものとして代表的なものだと思われる[12]。また、趙孟頫を元王朝第一の書家とする言説も存在したようである[13]。

このような評価が、趙孟頫没後、どのように変化していくのだろうか。次節では、元の次に成立した王朝である明の言説を確認しておこう。

第 2 節　明代の評価

まずは、明によって編纂された正史『元史』には、趙孟頫の書について、次のように記されている。

篆書・籀文・隷書・楷書・行書・草書、いずれも古今に冠絶しないものはない。ついにはその書によって天下に名を轟かした[14]。

---

[10] 蓋公之字法凡屢変。初臨思陵、後取則鍾繇及羲献、末復留意李北海。宋濂「題趙魏公書大洞真経」『鑾坡後集』巻九。本文は『宋文憲公全集』台湾中華書局、1966 年を参照。なお、引用文中の（　）は筆者による補註である。

[11] 趙孟頫が王羲之・王献之の書を学んだという記述は、元末の夏文彦（正卒年不詳）『図絵宝鑑』にも、同様の記述が見られる。

[12] 陳建志氏は、「三変説」について宋濂の言説を詳細に検討し、「宋濂の見解は誤りとは言えないが、イメージに近い概観をまとめた推測に過ぎず、確かな根拠に基づいて書いたようには見えない」と指摘している。陳、前掲論文、1－37 頁を参照。

[13] 例えば中西慶爾氏は、元の鮮于枢（1256～1301）が趙孟頫の書を当代第一としていたと指摘している。中西慶爾『中国書道辞典』木耳社、1981 年、709 頁を参照。

[14] 篆籀分隷真行草書、無不冠絶古今。遂以書名天下（宋濂ほか編『元史』巻 172 列伝 59）。本文は『元史』台湾中華書局、1965 年を参照。

前章で確認したように、近代以降の研究において見られる、「趙孟頫が各書体を能くした」という記述は、『元史』に基づくものであろう。

趙孟頫の書における特質を述べている例として、ここでは、明の項穆（生卒年不詳）による記述を取り上げておこう。彼は『書法雅言』において、次のように述べている。

> そもそも趙孟頫の書は「温潤閑雅」（おだやかで潤いがあり上品な趣がある）であり、王羲之の正当性に近似しているが、「妍媚纖柔」（美しく艶があり繊細な柔らかさ）であり、「大節不奪」（どのような時でも動じない）の気には乏しい。これは、趙孟頫が天水の末裔であり、仇である元王朝を受け入れたが故に手に入れたものである[15]。

ここには、趙孟頫の書における二面性が指摘されている。すなわち「温潤閑雅」と「妍媚纖柔」である。前者は王羲之の「正脈」に近接する要素として指摘されているが、後者は趙孟頫の書独自の要素として、彼が南宋の出身でありながら元に仕えたということを踏まえて指摘されているようである。

川瀬英幹氏は、項穆が、趙孟頫の書は技法の練磨によって成立していることを評価していると指摘している[16]。つまり、趙孟頫が王羲之の「正脈」を引き継ぎつつ独特の「妍媚纖柔」さを持つことを、項穆は高く評価していると言える。

ここで注目しておきたいのが、川瀬氏も指摘するように、項穆と董其昌における、趙孟頫に対する評価の差異である。作為的な書を嫌い、卒意の書を理想としていた董其昌は、趙孟頫を、理想とする晋・唐の古典的な書を再現できていないと非難している。董其昌は、『画禅室随筆』において、次のように指摘している。

---

[15] 若夫趙孟頫之書、溫潤閑雅、似接右軍正脈之傳、妍媚纖柔、殊乏大節不奪之気、所以天水之裔、甘心仇敵之祿也。項穆『書法雅言』「心相」本文は『景印文淵閣四庫全書』第 816 冊、台湾商務印書館、1986 年を参照。

[16] 川瀬英幹「項穆と『書法雅言』」『書論』第 34 号、書論研究会、2005 年、129－141 頁を参照。

古人の書は整然と作ろうとしたのではなく、さまざまに変化しながら書き上げたものが、結果的に整然と揃っているのである。これが、趙孟頫が晋唐の伝統的な書風を再現できていない所以である[17]。

このような董其昌の言説は、明から清に王朝が交代して後も影響があったように思われる。次節では、清時代における趙孟頫の評価を見てみよう。

第 3 節　清代の評価

本節では、清の言説を取り上げる。清の書論については、中田勇次郎氏が編纂した『中国書論体系』において網羅的に収集・整理が行われている。本項では主としてこれを参照し、検討してみたい。

例えば、清の馮班（1614～1671）は書の学習方法や歴代の書や書論を評論した『鈍吟書要』において、趙孟頫の書を「人となりに骨力がないので、字にも力がない」と述べている[18]。このような趙孟頫に対する批判的な言説は、董其昌の影響があるようにも思われる。

とはいえ、馮班は決して批判的な言のみを残しているわけではない。というのも、字形の作り方について述べた部分においては、次のように指摘しているからである。

字を形作るのは、晋人は「理」を用い、唐人は「法」を用い、宋人は「意」を用いる。「理」を用いていれば心の赴くままに筆を運んでも、規矩を越えることはない。・・・宋人が「意」を用いるのは、晋人の書を学ぶためである。・・・趙孟頫は（宋

[17] 古人作書、必不作正局。蓋以奇為正。此趙吳興所以不入晋唐門室也。董其昌『画禅室随筆』（論用筆）本文は、中田勇次郎編『中国書論大系』第 10 巻、二玄社、1999 年、17－18 頁を参照。

[18] 趙文敏為人少骨力、故字無雄渾之気、喜避難、須参以張従申徐季海方可。馮班『鈍吟書要』本文は中田勇次郎編『中国書論大系』第 11 巻、二玄社、1982 年、62 頁を参照。ここに見られる「少骨力」というのは、『書法雅言』における「妍媚纖柔」という評とも呼応する要素のように思われる。『鈍吟書要』の概要については、中西、前掲書、785 頁をあわせて参照した。

人よりも）さらに技法を用いて、宋人の意を加え、二王を追い求めたから、後世の人は及びもしないのである[19]。

技法の錬磨を評価する姿勢は、『書法雅言』とも共通するものだが、ここで注目しておきたいのは、趙孟頫の書に、「宋人の意」があると述べられていることである。趙孟頫の出自を参照すれば、自然な指摘のようにも思われるが、ここで宋の書との類似が指摘されていることは注目に値する。というのも、近代以降の研究においては、神田氏が述べていたように、王羲之・王献之という「理想の書」を追い求めたことが強調され、趙孟頫の書に「宋人の意」があることは、ほとんど省みられていないように思われるからである。

書においては、王羲之の生きていた晋の時代を、一つの理想的な古典古代として追求することが行われてきた。その後、唐から宋へと展開するのだが、趙孟頫の評価を整理するためには、ここで一度、各時代に対する評価を確認しておこう。このことについては、王澍（1668～1739）が書法学習について著した文献『論書賸語』に見られる次の言説が参考になる。

唐は厳格すぎる。宋は型にとらわれない自由さがあるが、唐の厳格さがなくなってしまった。趙孟頫に至って、王羲之・王献之を規範と定めた[20]。

宋において、革新的な表現が現れたことを称揚しつつも、王羲之の書が伝えられていないことが嘆かれている。その後、元の趙孟頫が王羲之・王献之を規範として学ぶことによって、宋の「自由さ」からの揺り戻しがあったことが強調されている。

---

[19] 結字、晋人用理、唐人用法、宋人用意。用理則従心所欲不踰矩。因晋人之理而立法、法定則字有常格、不及晋人矣。宋人用意、意在学晋人也。意不周匝病生、此時代所圧。趙松雪更用法、而参以宋人意、上追二王、後人不及矣。馮班『鈍吟書要』本文は中田、前掲書、39－41 頁を参照。

[20] 有唐一代書、格律森厳、多患方整。至宋四家、各以其超逸之姿、破徐成法。蓋拓向外来、而晋唐謹厳粛括之意亡矣。至趙子昂始専主二王、而於子敬得之尤切。閣帖第九巻、字々皆子昂祖本也。此於宋四家、故当後来居上。王澍『論書賸語』本文は中田、前掲書、215－216 頁を参照。『論書賸語』の概要については、中西、前掲書、1038 頁をあわせて参照した。

王澍はまた「魏・晋の書は学ぶには、唐の書にまず入門するべきである」とも述べる[21]。このように、唐を入口として、理想的な晋の書へと至ろうとする。晋の書、特に王羲之の肉筆が存在せず、その複製についても唐代までしか遡れないという状況を鑑みれば、唐の書から入り晋の書を学ぶ、という学習過程を、趙孟頫も実践していたと認識されていたのかもしれない。

このような指摘は、他の書論においても見られる。例えば、梁同書（1723～1815）が書について論じた『頻羅庵論書』では、「趙孟頫の和やかで潤いがある筆法（和潤寛博）は、二王から来ている」とされ、趙孟頫が王羲之を学んだことが主張されている[22]。

このように、趙孟頫の書における評価は、清においても元・明の評価を引き継ぎ、主として王羲之との関連において語られてきている。時代が進み清時代の後期に至ると、石碑や青銅器の銘文などを研究対象とする「碑学派」が台頭してくる状況を反映し、趙孟頫の書についても、彼が碑文の原稿を書いた石碑についての記述が見られるようになる[23]。

例えば、阮元（1764～1849）は『北碑南帖論』において、「趙孟頫の楷書は李邕の書をならう」と述べ、端正な字を書くときは北派の碑を参照することの例としている[24]。

趙孟頫の書は、王羲之の複製＝法帖を学んで形成されたもの、すなわち典型的な「帖学派」の書と分類される。そのためか、碑学派にとっては、基本的には批判的に述べられるように思われる。

---

[21] 魏晋人書、一正一偏、縦横変化、了乏蹊径。唐人斂入規矩、始有門法可尋。魏晋風流、一変尽矣。然学魏晋、正須従唐入、乃有門戸。王澍『論書賸語』本文は中田、前掲書、201－202 頁を参照。

[22] 松雪和潤寛博之筆、従二王来。唐宋人駿厲厳粛、多以法勝。得晋法者、故推松雪。梁同書『頻羅庵論書』本文は中田、前掲書、268－269 頁を参照。『頻羅庵論書』の概要については、中西、前掲書、841 頁をあわせて参照した。

[23] 石碑などを研究対象とする「碑学派」は、北宋の欧陽脩（1007～1072）に始まり、元・明では一時衰退したとされる。これが清において再び台頭してくることには、清王朝が政治批判を厳しく取り締まったという状況が反映されている。すなわち、古い碑文・銘文を研究対象とすることによって、政治批判となる議論を避けようとしたのである。「碑学派」については中西、前掲書、825－826 頁を参照。

[24] 元趙孟頫楷書、摹擬李邕。（中略）蓋端書正画之時、非此則筆力無立卓之地、自然入于北派也。阮元『北碑南帖論』本文は中田勇次郎編『中国書論大系』第 15 巻、二玄社、1983 年、76－77 頁を参照。

碑学派を代表する人物の 1 人である包世臣（1775～1855）も、『安呉論書』において、「古人の書は変化多彩、趙孟頫の書は「平順」である。趙孟頫の書が流行し続けたのは、科挙受験生にとって便利なものだったからである」と述べている[25]。ここでは、趙孟頫の書を没個性的なものとして批判的に捉え、書そのものを低く位置付けている。

このような認識は最終的に、趙孟頫と、趙孟頫を批判していた董其昌を、漠然と同一の流れに位置付けるようになっていく。清末から中華民国初期の劉咸炘（1897～1932）の書論『弄翰余瀋』では、唐の石碑が書法学習の対象として用いられることについて、次のように述べている。

> 翁方綱（1773～1818）が広く唐の石碑を論じるようになったのは、昔に比べて趙孟頫・董其昌を墨守するだけに比べて一段階高くなっている[26]。

碑学派の興隆を称揚するために、趙孟頫と董其昌という、明、あるいは清時代中期頃までは明確に区別されていた二人の書家を、一括りに論じている。劉咸炘は、唐の石碑を手本として学んだ名家はいないことに対して、次のようにも述べている。

> 実は名家と言われる人々は、趙孟頫・董其昌が盛行してから、真に唐の石碑を学ぶものがいなかっただけである[27]。

このように、碑学派の興隆に伴い、趙孟頫の書には厳しい評価が下されるようになる。ここまでの言説を踏まえて、趙孟頫の書における評価の変遷がどのようなものだったのか、まとめておこう。

---

[25] 呉興書筆、専用平順、一点一画、一字一行、排次頂接而成。古帖字体、大小頗有相逕庭者。（中略）其所以盛行数百年者、徒以便経生胥史故耳。包世臣『安呉論書』「論書一」本文は中田、前掲書、186－188 頁を参照。

[26] 翁覃溪広論唐碑、較昔之止守趙董者高矣。劉咸炘『弄翰余瀋』本文は中田勇次郎編『中国書論大系』第 18 巻、二玄社、1992 年、304 頁を参照。

[27] 実則無名家者、自因趙董盛行、無人真学唐碑耳。劉咸炘『弄翰余瀋』本文は中田、前掲書、353－354 頁を参照。

おわりに

本稿では、まず、近代以降の先行研究を概観し、趙孟頫が王羲之の書に復帰しようとした「復古主義者」と位置付けられていることを確認した。次に、近代以前の言説に立ち返り、趙孟頫の書における評価が、次のように変遷していることを明らかにした。すなわち、①趙孟頫在世時は、宋の書から影響を受けたと指摘されつつも、王羲之を学んだという点が強調されていた。②明にいたり、その書が作為的とされ、董其昌から厳しい非難を受けていた。これは、王羲之という理想的な古典をどのように表現するか、という点において、趙孟頫と董其昌の見解に相違があったためであろう。③清では、王羲之を範として学んだことが評価されていたものの、碑学派の台頭によって、厳しい評価が与えられていた。さらに、「碑学派ではない」という観点から、趙孟頫も董其昌も同一に扱われ、分類されることとなった。

このように、趙孟頫の書における評価の変遷を振り返ると、彼の書は常に二元論で語られている。すなわち、①においては王羲之か否か、②においては卒意的か作為的か、③においては帖学派か碑学派か、という二元論である。神田氏が『中国書法の二大潮流』において、中国書法史を「伝統的な書風」とそれに「叛旗を翻した」書風に分類したことを踏まえれば、このような二元論は中国書法史全体に対して、支配的に存在しているようにも思われる。

各時代の書家を二元論で分類すると、個々の作品における造形的特質について明瞭に語る必要がなくなる。結果、趙孟頫の書がどのような質を持つのかということについては、いまだ漠然とした言説に終始している。書論には漢語による評価があるものの、これらは毛筆で文字を書くという制作経験がなければ理解できないものも多い。現代では、文字は「書く」ものから「打つ」ものへと変化しつつあり、書の造形的特質はさらに理解しづらい状況にある。このような状況を踏まえれば、今こそ趙孟頫の「書」そのものに立ち返り、詳細な造形分析からその特質を考察することが必要となるだろう。

参考文献

『新潮美術辞典』新潮社、1985 年
『故宮法書選一　書譜』二玄社、2006 年

『宋文憲公全集』台湾中華書局、1966 年
川瀬英幹「項穆と『書法雅言』」『書論』第 34 号、書論研究会、2005 年、129−141 頁
神田喜一郎『書道全集』17、平凡社、1956 年
神田喜一郎『中国書法の二大潮流』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会、1959 年
陳建志『趙孟頫の書における時期区分の研究』筑波大学博士論文、2014 年
中田勇次郎『中田勇次郎著作集』第 4 巻、二玄社、1985 年
中田勇次郎編『中国書論大系』第 10 巻、二玄社、1999 年
中田勇次郎編『中国書論大系』第 11 巻、二玄社、1982 年
中田勇次郎編『中国書論大系』第 15 巻、二玄社、1983 年
中田勇次郎編『中国書論大系』第 18 巻、二玄社、1992 年
中西慶爾『中国書道辞典』木耳社、1981 年